

災害医療と腎臓医

東北大学病院血液浄化療法部 宮崎 真理子

災害対策には、準備、応急対応、復旧、復興の4つのフェーズがある。東日本大震災が発生して1年以上経過した現在は復興のフェーズにあるといえる。現在までに応急対応については多くの発表があるが、慢性疾患である腎臓内科の領域ではすべてのフェーズにおいて災害に関連した貴重な経験をしており、それは今も続いている。特に災害後に、生活や療養環境が変化したことで、腎臓病の経過に様々な影響がみられたことなど、我々、東北の女性腎臓医がこの1年で失ったものも多かったが、一方で学んだこともまた多い。今回は学んだことに焦点をあて、活動報告とさせていただきます。

IgG4 関連腎臓病

長岡赤十字病院 内科 佐伯 敬子

IgG4 関連疾患 (IgG4-RD) はリンパ球と IgG4 陽性形質細胞浸潤の著しい浸潤と線維化により全身諸臓器の腫大や結節、肥厚性病変を認める原因不明の疾患である。日本から発信された新たな疾患概念であり、日本腎臓学会もいち早く IgG4 ワーキンググループを設立して 2011年9月 IgG4 関連腎臓病の診断基準を発表したが、米国をはじめ世界も IgG4-RD 研究に力を入れてきており続々と新しい論文が出ている。今回は第1回国際 IgG4 シンポジウム (2011年10月@ボストン) の内容も含め IgG4 関連疾患をめぐる世界の最新の動向と、腎臓医が IgG4-RD との関連で今後注目すべき病態を提示したい。

最新腎移植

名古屋第二赤十字病院 腎臓内科 武田 朝美

1984年に大学を卒業し研修医時代に腎生検病理と出会い、1989年から現在の名古屋第二赤十字病院において腎臓内科医として腎病理医として腎移植に関わってきた。腎生検病理および移植腎病理を自身のキャリア形成の中心に置くことによって、多くの先輩方に出会い教をいただき、また多くの仲間ができて共に学ぶことができている。

私に関わってきたこの20数年間でも腎移植の臨床はめざましく変化した。拒絶反応を抑えて生着率を上げる時代から、移植患者の予後 QOL を考える時代となった。移植領域での免疫抑制薬の進歩は著しく、その知見により腎疾患治療も大きく影響を受けてきている。腎移植に関わる腎臓内科医の輪を広げるべく、進んでいきたいと思う。

最新 CAPD

順天堂大学腎臓内科 濱田 千江子

腹膜透析が本邦に紹介され、末期腎不全の腎代替療法の1つの選択肢として定着したが、腹膜透析の導入から維持管理、さらに他の腎代替療法への移行といった包括的腎不全管理のシナリオが提案され、この有用性が海外の臨床試験によって明らかにされているにも関わらず、過去に10%の導入患者を認めたものの、現在は3%程度の普及に留まりアジア圏の近隣諸国とは大きく事情を異にしている。腹膜劣化抑制への積極的な介入の効果の検証や障害腹膜の病態の検討が行われ、簡単で安全な治療の提供への取り組みが始まっている。本邦の腹膜透析を取り巻く現状と臨床・研究分野での情報をお示しすることで、これからの腹膜透析療法のベクトルを感じていただきたい。